「言葉」で通じなくても

益田市立東陽中学校　三年　　市原想來

二十九万七千人。この人数は全国の聴覚障害者の人数です。聴覚障害とは、外部の音声情報を大脳に送るための部位である外耳、中耳、内耳、聴神経のいずれかに障害があり、聞こえにくい、あるいは聞こえなくなっている状態のことです。

みなさんは、聴覚障害のある人と話したことがありますか。ほとんどの人がないのではないでしょうか。ある時、母の会社で手話の教室があったので、私は母に付いて行ってみました。行ってからしばらくは、「どうやって話すのだろうか。」と疑問に思っていました。しかし、教室の中で聴覚障害のある人もない人も関係なく話していて、「手話ってすごいな。」「かっこいい、やってみたい。」という気持ちになりました。教室の帰り。母に「やめてもいいから一回教室に行ってみたら。」と言われ、行ってみることにしました。最初は名前や数などの簡単な手話を教えてもらいました。少しだけですが、手話の先生と話せるようになりました。手話をやっていくうちに楽しくなり、ある時母に「手話の検定受けてみたら。」と提案されました。私は不安だったけど、「一つのチャレンジだな。」と思い、受けることにしました。手話の検定を受けるために本を買いました。最初の方はやったことのある名前の言い方などで、「余裕かな。」と思っていましたが、手話の単語が約四五〇個と多く、とても苦戦しました。検定当日、会場にはお年寄りの方や小学生など様々な年齢層の人がいました。検定内容は、筆記テストと聴覚障害のある方との一対一での会話でした。一対一の会話はとても緊張しました。手話で質問されたことを理解して、答えるというのが難しかったです。しかし、勉強した甲斐もあり、自分が言いたいことを相手に伝えることができました。その後、五級に合格することができました。

周りから見たら耳が聞こえるのか聞こえないのかはわかりません。例えば、駅の改札で止まっている人がいてその人はやり方がわからなくて止まっているのか、改札機が鳴っていてそれに聞こえないから気づかないで止まっているのかは周りの人から見ただけではわかりません。私たちは普段、話すときに『言葉』でコミュニケーションをとることができます。相手が怒っているのか、悲しんでいるのか嬉しいのかなど口調などで分かります。しかし、聴覚障害者との会話ではそれでは気持ちは伝わりません。だから、首を傾げて質問をしたり、顔の表情で判断して会話をしたりしています。

普段私たちが口で話す『言葉』は耳が聞こえる人にしか伝わりません。手話をみんなができるわけではないですが、聴覚障害のある人と話すには筆談や手話といった方法でコミュニケーションをとることはできます。困っている人がいたら、『言葉』が通じなくても筆談などで、助けていきたいと思いました。これからも手話は使えるから、また検定に挑戦して級をとっていきたいです。耳が聞こえる人も聞こえない人も相手が何を言いたいのか理解しようとする気持ちが大切だと思います。